

【臨床検査値に関して】

基調講演の「臨床検査値を活かした処方鑑査と服薬指導」を聴いて、薬物治療を行う上で検査値を理解する必要性を改めて感じました。

印象に残っている内容は、処方鑑査の目的は安全性と有効性の確保である、ということです。患者さんに対する薬物の安全性を優先するだけでなく、かつ有効性の確保も必要だということを学びました。今までの服薬指導において検査値を見せて頂いたときに、薬物治療の効果や副作用の発現が無いか確認していましたが、例えば肝臓や腎臓の検査値の悪化があった場合に「この薬を続けていいのか」といった安全性の面だけを考えていました。副作用発現の可能性がある場合に、安全性を優先して処方中止を提案するだけでなく、有効性を確保するために代替薬など具体的な提案ができるようになりたいと思いました。

2年間における千葉大学医学部附属病院に対する門前薬局の検査値関連の疑義照会状況の内容は副作用の未然回避が多く、処方変更になった項目は腎機能、血清カリウム、肝機能が多いといった結果でした。また医薬品別検査値（特に注意が必要な薬剤と検査値情報の組み合わせ）の利用率が高く、全ての処方箋に共通の検査値を印字する固定検査値の利用は高くなかった、との結果でした。課題点として、各門前薬局の処方箋の応需数と疑義照会の件数とのバランスにギャップがあるという点が挙げられました。本来であれば処方箋応需のバランスと疑義照会件数のバランスが一致するはずであるが、疑義照会に積極的な薬局もあればそうでない薬局もあるということが浮き彫りになった結果でした。この結果を受けて、患者さんの薬物治療の安全性・有効性の提供が薬局によって異なることは、良くないと強く思いました。

千葉大学医学部附属病院では医薬品別検査値を別に記載して院外処方を発行していますが、一般的に処方箋に記載される検査値は固定検査値が多いと思うので、検査項目と服用薬との関連性について気づく・分かる力が必要だと感じました。加えて検査値だけでなく、副作用発現が考えられるときに症状も確認する事を日頃から意識しようと思いました。

外来の患者さんのなかでも、特に腎機能が低下傾向にある方は多いと思います。また低下傾向にあっても、あまり気にしていない方が多い印象があり、熊本は透析の導入が多いと言われています。

今後の目標は、まずは腎機能と薬物について知識をつけることです。腎機能低下時に用量の調節が必要な薬はたくさんありますが、処方されているときに気づく力、重要な副作用の徴候を把握し具体的な症状を予め注意喚起する力をつけること、生活習慣について勉強し服薬指導に活かせるようになりたいです。患者さんにとって安心・安全・納得が得られるような服薬指導を目指します。

今日から意識する事は、日頃から疑問に思うことやわからないことをそのままにしない、日々の気づきを研究することです。モチベーションを維持して取り組んで参ります。